

西アフリカ・サヘル地域における村落部住民の生業行動

—ニジェール南部のハウサとフルベの村落を事例に—

小村 陽平

キーワード： 「危機の年」、サヘル地域、生業、村落、対処行動、出稼ぎ、ハウサ、フルベ

1. 背景と目的

サヘル地域はサハラ砂漠の南側に位置し、東西に帯状に広がる半乾燥地域である。サヘル地域では、干ばつ、不規則な降雨などが原因で不作や家畜の損失が起これ、人々の暮らしが著しく困窮する「危機の年」となることがある (Mortimore and Adams 2001)。このようなサヘル地域では、気候的要因により食糧生産が不安定なことから貧困が問題となり、多くの地域開発支援が行われてきた。そして、地域開発支援を行うにあたっては、人々の生業と危機管理の仕組みを理解した上での実効性ある支援が必要であるという考えのもと、本研究では、サヘル地域の村落部住民の生業を捉え、生業に内在された危機管理の仕組みについて明らかにすることを目的とした。

2. 調査地域と調査方法

現地調査は2011年8月～2012年12月の間に4回、合計7ヶ月間行った。調査地はサヘル地域に位置するニジェール南部のマラディ州テッサウア県テッサウア・コミュニオンであり、調査村には、ハウサのタカサバ・マラディ村とナフタ村、フルベのルガゲ・ナフタ村の3村を選定した。調査は、質問票を用いた聞き取り、村人との対話、参与観察、資料収集により行った。

3. 結果と考察

ハウサの主たる生業は農耕であり、それに加えて小家畜の飼養、採集、漁労、野菜栽培、その他の現金獲得活動が行われていた。フルベの主たる生業は牧畜と農耕であり、それらに加えて、採集、出稼ぎ、牛乳の行商が行われていた。このようにハウサとフルベは農耕と牧畜だけでなく、時期と担い手を変えた複数の生業を組み合わせた生業複合により暮らしを営んでおり、業複合はひとつの生業が失敗した場合の危機管理となっていることが明らかとなった。

ハウサとフルベは認識した「危機の年」において、小家畜の売却、ウシの売却、採集、薪売り、糠を食す、援助食料の受給、出稼ぎにより対処しており、「危機の年」にはそれぞれの生業がその年の状況に合わせて、量や回数や期間が日常の範囲を超えて行われることにより対処行動となっていた。このことから、ハウサとフルベの生業には危機管理の仕組みが内在されていることが明らかとなった。そして、「危機の年」の対処行動は、小家畜の売却、ウシの売却、採集、薪売りのような域内における生業と、出稼ぎのような域外における生業に分けることができた。

域外における生業としての出稼ぎに着目したところ、調査においては多くの村人が出稼ぎを経験しており、近年においても毎年一定の人数が出稼ぎに行っていたことから、村人にとって生業としての出稼ぎは常態化していた。村人の出稼ぎは国内のみならず国外の都市にまで広域的に広がっており、多岐に渡る出稼ぎ先での労働の内容は、特定の技能を必要としないインフォーマルセクターでの労働となっていた。そして、村人は、食料と衣類の購入、住居の建設などの生活基盤を整える目的のために出稼ぎに行っていたことから、サヘル地域の村落部住民の生業複合において出稼ぎは欠かせない生業のひとつとなっていることが明らかとなった。

Mortimore, J. M., and Adams, M. W., 2001, Farmer adaptation, change and 'crisis' in the Sahel, *Global Environmental Change*, Vol. 11, pp. 49-57.

